

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	18102002	研究期間	平成18年度～平成22年度
研究課題名	16-19世紀、伝統都市の分節的な社会＝空間構造に関する比較類型論的研究	研究代表者 (所属・職)	吉田 伸之（東京大学・大学院人文社会系研究科・教授）

【平成21年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A
	B
	C

(意見等)

研究代表者が1992年より取り組んできた都市史研究のスタイルは、『年報都市史研究』という良質な出版媒体や関連書籍の刊行により、一定の優秀な研究者集団を創り上げ、ひとつの学派を創出してきた。こうした系譜や成果をさらに国際的に展開する試みとして注目されるプロジェクトであり、実力ある研究者が個別に、そして相互に、それぞれの地域をベースにした都市史研究を深化させ始め、比較の視座を徐々に展開させ始めていると現時点では評価できよう。

こうした国際共同研究の展開に欠かせないのは、濃密で実質的な研究者交流であり、そのためのプログラムは多彩に用意され、実行されていると判断する。何よりもユニークな点は、いくつかの研究グループ、研究会のテーマが斬新かつ魅力的であり、決して総花的でない有機的な連携が伺われるところであろう。それを支える分節構造論、都市アイデア・都市インフラ、権力秩序論をもとに伝統都市をターゲットにした研究展開は、分節構造論が各国都市史研究に適応可能という状況に達しているようであるが、トータルにはまだ見えていない。その実現は困難な課題であるが、残された期間内にある程度達成して欲しい。

なお、予定の出版物の刊行に若干の遅れが生じており、また、webに代表される情報インフラの整備も十分ではないため、貴重な研究成果の広報、そして保存という面には、今後十分に注力して欲しい。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。
A	16-19世紀の伝統都市の社会＝空間構造を明らかにする基礎史料の調査・収集を進め、国際的な研究交流を行って比較類型的な把握を試みた。研究成果は、シンポジウム5回・ラウンドテーブル&ワークショップ16回、『シリーズ・伝統都市』全4巻・『年報都市史研究』14-19号の刊行という形で公表されている。今後、研究期間内に調査・収集した国内外の諸史料、特に海外で収集した史料の活用のための方策を含めて、伝統都市間の比較類型把握が深化されることを期待する。